

市内遺跡の発掘調査も後半期がはじまりました。前半期に引き続き、二つの大きな現場が調査されています。
 えんまどう
 ます。一つは焰魔堂遺跡(古高・経田遺跡)で、縄文から平安時代にかけての集落や川跡等が見つっています。もう一つは金森東遺跡で、弥生時代後期から平安時代にかけての墓や溝等が見つっています。その他に、下之郷遺跡や伊勢遺跡では、集落の広がりを探るための範囲確認調査を続けているところす。

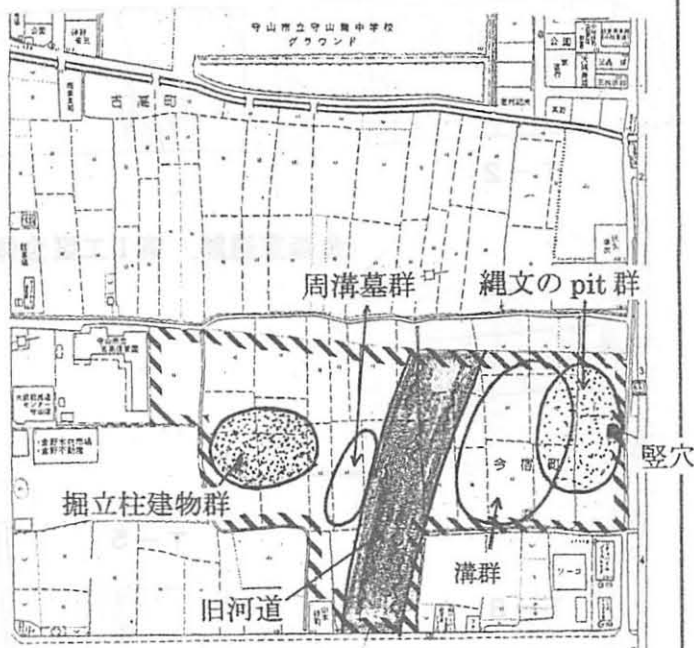
☆発掘調査だより☆

1. 焰魔堂遺跡(古高・経田遺跡)の調査

調査は第1～3工区の広範囲にわたるため、いくつかの遺跡を含むことになります。前号までは、古高・経田遺跡という名称で報告をしてきましたが、第1工区に関しては、厳密に言うと焰魔堂遺跡になりますので、今回からは、焰魔堂遺跡として報告します。

焰魔堂遺跡の第1工区調査は昨年12月から始まり、終盤に差し掛かっています。今回は、約1年間にわたる調査成果を簡単にお知らせしたいと思います。

調査区の中央に北西方向の旧河道(弥生後期)があり、その左岸には、周溝墓群(古墳時代前期)や掘立柱建物群(平安後期)が見つっています。また、右岸には、縄文土器が埋まっている柱穴群や溝群(古墳後期～平安)、竪穴住居群(古墳前期)が見つっています。尚、この溝群からは、サヌカイト製の鏃や剥片などが多数見つっています。第1工区の調査終了後、次は北東方向(第2工区)へと調査を進めて行きます。展望としては、縄文時代の集落の様子がわかって来ると思います。(藤原)



焰魔堂遺跡 平面図

2. 金森東遺跡(第30次)の調査

9月までにくすのき通りの湖岸側(山柿団地の南側)の調査を終えました。

T-1、T-2では前号紹介したとおり、奈良時代のピット、数条の溝、弥生時代後期の方形周溝墓、井戸が見つかりました。

T-3、T-4は溝や土坑のほか、たくさんのピットが見つかりました。いずれも遺物が少なく時期の特定には至りませんが、T-1の井戸や、T-2の方形周溝墓の埋土と色、質が同じことから弥生時代後期かと思われます。

T-5からは、中世の南北方向に延びる溝と古墳時代後期の重なり合う溝が見つかりました(SD-1、SD-2)。

目次

☆発掘調査だより☆

- | | |
|----------|----|
| 1. 焰魔堂遺跡 | 1p |
| 2. 金森東遺跡 | 2p |

☆文化財の窓☆ 「下之郷遺跡の 絵画土器」

- | | |
|------|----|
| お知らせ | 4p |
|------|----|

SD-2はSD-1が埋まった後に掘られたことが断面の観察から考えられます。これらの2つの溝から出土した須恵器は、どれも6世紀代のもので時期差がほとんどないことから、SD-2は、SD-1が埋まって程なく掘られたと考えられます。

T-6は遺構が少なく、調査区の北東端で溝の一部が見つかりました。溝は、溝は明灰褐色の土で埋まっており、時期は出土した土器から中世と考えられます。この溝からは、土器の他、獣骨が見つっています。何の動物かは特定できませんが、過去の伊勢遺跡の調査でも、中世の川跡から牛の骨が見つかり、食用あるいは皮革製品を作るために解体されて川に破棄されたと考えられており、今回出土した獣骨も同様であったことが推測されます。

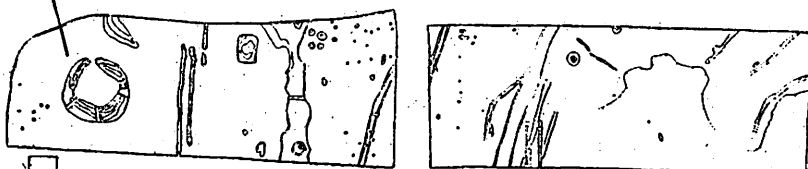
T-7もT-8と同様、遺構が少なく、索堀り溝が3条とピットが1基検出されたにとどまりました。時期は出土した土器が細片で特定するに至りませんでした。

9月までの調査から、弥生時代後半と中世の2時期にこの地が活用されていたことが考えられますが、どちらの時期においても南へいくほど遺構が少なく、希薄になることから生活域が北側にあり、南側は人の手があまり加えられなかった土地であったのではないかと思います。

10月からは、くすのき通りを挟んで東側(守山高校側)を調査しています。新たな発見を順次、「乙貞」で報告して行きたいと思います。

(大岡)

方形周溝墓



T-2

T-1

金森東遺跡 第I工区全体図

T-4

0 10m

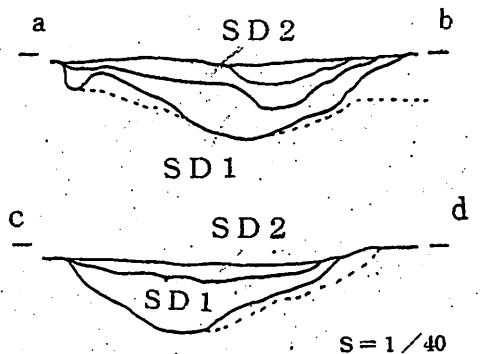
T-3

T-5

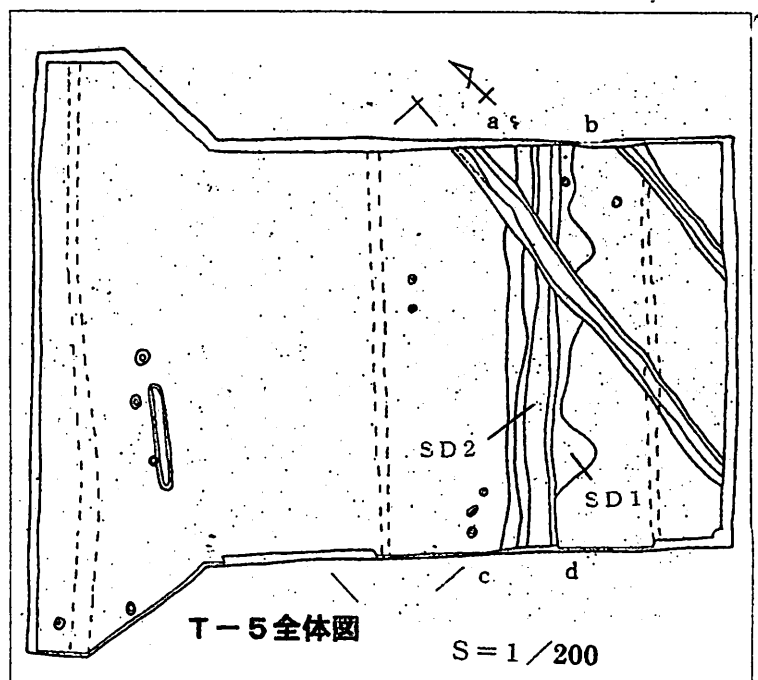
獣骨が出土した溝

T-6

T-7



SD 1・SD 2断面図



T-5全体図

S=1/200

☆文化財の窓☆

下之郷遺跡の絵画（記号）土器

平成8年、下之郷町で倉庫建築に先立って発掘調査を実施したところ、地下約1mの地層から土壇（大きくて深い穴）が見つかり、中からほぼ完全な形を保った水差型土器と、破片になった甕型土器と、壺型土器が出土しました。埋蔵文化財センターに持ちかえて水洗いしてみると、壺の胴体にあたる破片に、絵が描かれているのではないかと考えられる線のあることがわかったので、さっそく破片を接合して、壺を復元してみました。壺は30点余りの破片になっていましたが、幸いにもほぼ全体が残っており、口が筒状で胴体は縦に長い楕円形になっている形（短頸壺）に復元することができました。

胴体に、太い2本の線と棒の先で点を押したものがあって、記号というより絵であると考えられました。この絵は、壺をつくるときに表面を仕上げる刷毛目調整という荒い線の上から書かれていて、少し見にくいのですが、船を表しているのではないかと考えられます。（下図）

よく観察すると、太い2本の線が三日月のような形に描かれ、その上弦の上に点が押されています。三日月の形が舟を表現しており、点は人間の頭か、櫂（かい）を表しているものと思われました。

壺の土を観察してみると、下之郷一帯で作られた土器の土と少し違って、黄色い土を使っていることがわかりましたので、下之郷村の外から持ち込まれたものではないかと想像していますが、何処からとなるとはつきりわかりません。

近くでは、弥生時代の絵が描かれている土器が栗東市下鉤（しもがかり）遺跡で発見されていて、建物を表現していることがわかっています（中期）。服部遺跡、吉身西遺跡、塚之越遺跡、下長遺跡など後期の壺に記号が見られており、後期には流行していることがわかっていましたが、中期土器にはほとんど見つかりませんでした。

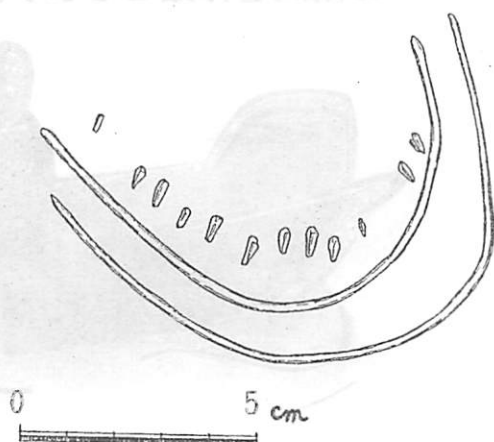
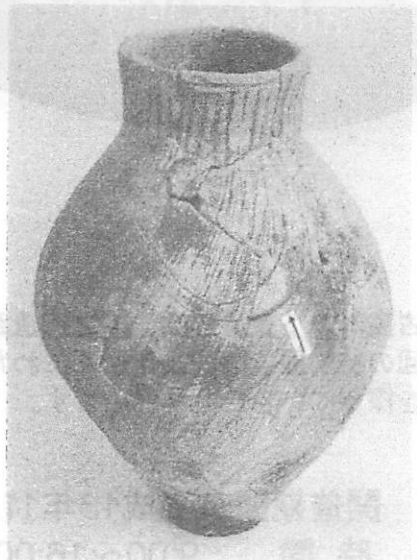
今回の土器が舟の表現である場合、日本海や大阪湾などの地域から運ばれた土器か、琵琶湖沿岸の土器であると思われるが、貴重な水運を探る資料となります。

また、これまでに下之郷遺跡で発掘された出土品を再点検したところ、鹿の絵画と思われるものが、くすのき通りの発掘調査で出土していることがわかりました。やや見にくくなっているのですが、各地で発見されている鹿と共通した絵になっています。動物の絵では圧倒的に鹿が多く、食糧としただけでなく、信仰の対象となっていたことが推定されていて、下之郷遺跡も弥生時代の他の遺跡とよく似た生活をしていただと思われる。

次に、記号と考えられるものも他に数点ありました。いずれも壺の表面に描かれたもので、細い線で円弧を描くように引かれた線、○の印を付けたものなどです。この記号については残念ながら目的が明確ではありません。奈良県唐古鍵遺跡や清水風遺跡では建物や動物が描かれた土器がたくさん発見されていて、絵画土器のメッカとなっています。このような地域の影響を受けて、下之郷遺跡や下鉤遺跡の絵画が描かれたのでしょうか。

今後の調査でも発見される可能性が高いので、土器を注意深く観察していきたいと思います。

（山崎）



肩部に描かれた絵画

市内の文化財行事
お知らせ

埋蔵文化財センター秋季特別展
湖南における
古墳時代のはじまり
—下長遺跡をめぐって—

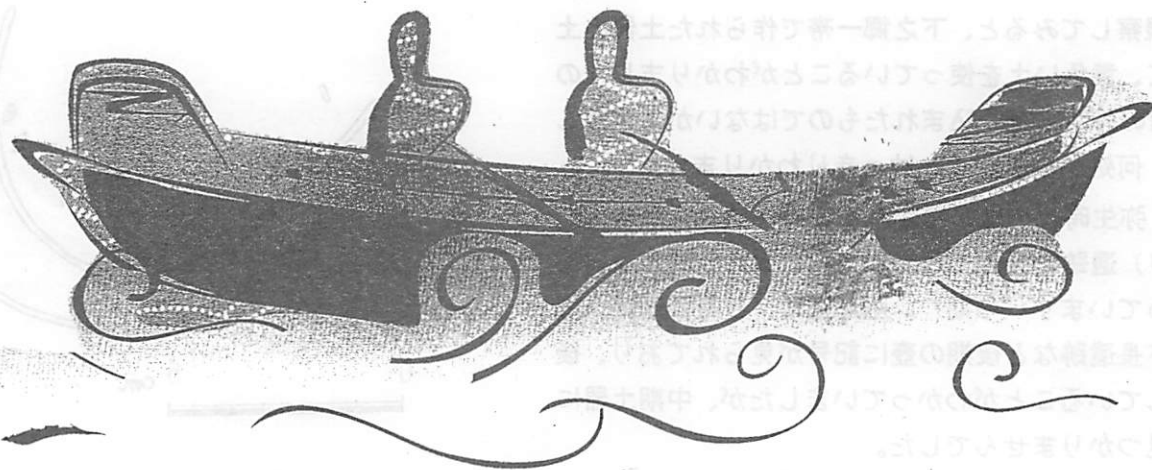
古高町の下長遺跡は、下之郷遺跡・伊勢遺跡につづく時期の遺跡として、近年注目度が高まっています。今回の特別展では、20年近くにわたって積み重ねてきた調査の成果を集め、弥生時代から古墳時代への変革期を探っていききたいと思います。

開催期間：平成13年11月18日(日)～12月2日(日) (期間中無休)

時間：9:00～16:00 入場無料

場所：守山市立埋蔵文化財センター

※特別展開催準備等のため 11/13 から 11/17 までと 12/3 から 12/5 までの期間を休館とします。



講演会 11月23日(祝) 午後 1:30 ～ 3:30

「古墳時代のはじまりと近江」

講師：寺沢 薫（奈良県立橿原考古学研究所）

場所：市立埋蔵文化財センター 2階会議室

—編集後記—

吉身小学校(5年生)と下之郷遺跡で栽培していた「赤米」の収穫が、先月末におこなわれました。栽培面積は200㎡。収量は60kg。ほとんど無肥料で昨年度とほぼ同じ分量の取れ高でしたが、現在の田んぼ(キヌヒカリ)と比較すると収量はおよそ半分。昔の田んぼと今の田んぼでは、「品種」・「栽培方法」・「生育状況」と明らかに違います。現在は、小学校の給食の残飯から作られた有機肥料を田んぼに入れて、土づくり。レンゲの種を蒔きました。(k記)

(今号は、パソコンが印刷直前に故障してしまい、一部読みにくいものとなりました。紙面をかりてお詫び致します。)